寄宿学校の平等主義者

pepe

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、犬塚露壬雄とジュリエット・ペルシアとのバレてはいけない恋の物語ではない。

これは、学園で唯一平等であろうとした者の物語。

目次

プロローグ　1
一話　12
二話　22
三話　31

プロローグ

東和国とウエスト公国の中間に位置ダリア島。そこには、両国から学徒を募る学園があった。

その学園の名をダリア学園という。学園では、両国の生徒が共に認め合い、協力し切磋琢磨する素晴らしい学園。

それがダリア学園だ。

「「くたばれぇぇぇ!!」」

嘘である。

両国は今敵対状態であり、東和国専用寮黒犬寮（ブラックドギー）とウエスト公国専用寮白猫寮（ホワイトキャッツ）は敵視しあっていた。そして、事あるごとに争い合うのだ。

昼夜問わず何処かで代理戦争という名の闘争が行われる。それは、ＨＲが行われる前の中庭でもだ。黒と白の制服が入り乱れながら、怒号と土埃が舞う中庭。それを廊下から見下ろす者がいた。

彼は黒の制服で身を包み窓枠に頬杖付いて、その闘争を見守っている。名は、樽目（たるめ）司安（しあん）黒犬高等部１年の男子生徒だ。黒髪黒目のごく普通の東和民であり顔立ちはいいが、独特な雰囲気の生徒である。だが、問題児というわけではなくむしろ優秀な生徒だ。

けれど、彼は白猫との争いに極力参加しない事は黒犬陣営の中でも異質であった。

闘争が激しくなるなかで彼は少しばかり顔をしかめる。彼の瞳にはジュリエット・ペルシアに警棒で殴られた犬塚露壬雄を映っていた。

殴られた彼は数メートル吹き飛び狛井蓮季介抱してもらっているものの、ダメージが残っているようで直ぐには立とうとしない。

より闘争が激しくなろうかというところで、教職員たちが中庭に現れて生徒たちの多くは逃走していた。

「すげぇな犬塚、俺なら泣くわあれ」

そんなことを呟いて司安は窓から離れ、教室へと戻っていく。教室には既に、黒犬と

白猫の生徒合わせて十数名ほど生徒が集まっていた。
あと数分でＨＲが始まることを確認すると適当な椅子に腰掛けて、一限目の教科の準備を始める。そんな彼の隣には、初等部からの付き合いである歩米良仁愛が座っていた。
仁愛は司安の方に目を向けて「ねぇねぇ」と話しかける。一方で樽目はというとめんどくさそうにしながらも、仁愛の話に耳を傾けながら授業の準備を続けていた。
「今日も参加しなかったんだね」
「争いは嫌いなんだよ、痛いだろ。それに、俺は平等主義者だ。白猫とか黒犬とか関係ないんだよ」
当然だと言わんばかりの顔に仁愛は引いてしまう。黒犬は白猫と対立関係にあるにも関わらず、痛いからという理由と後は適当にこじつけた理由で参加しないのは一年男子の黒犬では司安だけだ。
「……あはは。でも、そろそろ参加しないと丸流になんか言われるんじゃないの？」
「そうかもな、あいつと犬塚は暴力的だからな」
「樽目は変わってるよね」
「そうかもな自覚はあるよ。ここにいる奴らはみんないがみ合ってるもんな」
司安の指すみんなの中に、司安（彼自身）が居ないのではないかと仁愛は思ってしまう。司安は

白猫と争わないため、教職人からの信頼も厚い。初等部の生徒たちならば、黒犬や白猫問わず助けている事が目撃されている。

故に黒犬高等部の中では、司安を気にくわないと思うものも多かった。それでも彼にとってはどこ吹く風であり、それをやめようとはしない。

仁愛は、初等部から司安を知っているが理解はできなかった。それぞれ意思は違うものの、『白猫は敵』という共通認識が樽目には無かったからだ。

準備し終えた司安は、考え込んでいるのか動かない歩米良の方に目を向ける。その視線に気がついたのか仁愛は、慌てた様子でなんでもないと誤魔化した。

「まぁ、いいか」と呟いた彼は、ぞろぞろと乱れた制服をしている生徒たちが教室に入ってきていることに気がつく。中庭で争っていた生徒たちが戻ってきたのである。

「それより、狛井が戻ってくるかも知らんから離れてくれ」

「相変わらず蓮季が苦手だねー」

「うっせ、さっさとしろ」

笑いながら離れていく仁愛に入れ替わりで、後ろの席に座っていた獅子静香が彼の隣に座った。彼女は仁愛と蓮季の友人であり、司安にとっては天敵でもあった。

「お前今まで後ろに座ってたんだから聞いてただろ」

「いや、面白いかなーって」

「お前も歩米良も狛井と仲良いから困るんだよ。あいつ俺に当たり強いし」
「それは樽目が悪いよ。蓮季は、いつも黒犬の生徒たちのこと考えてるのに樽目は勝手なことばっかりするから」
「一匹狼っぽくてかっこいいだろ？」
「そういうところがダサいよ」
「……さいですか」と少し落ち込みながらも、司安はそそくさと先程準備した教科書とバッグをもって席から立ち上がろうとする。逃げようとしたのだ。ここで静香が離れるよりも自分が離れた方が早いと自覚しているからその答えに至った。
だが、静香はそれを逃さず両手を司安の両肩に置いて力ずくで座らせる。ズガッと椅子と床の摩擦音が教室の中に響き、辺りが二人を見つめる。当然その中には先程離れていった仁愛の姿もあった。
（やばい）
そう、司安が思った時にはもう遅かった。仁愛（対象）は、ニコニコと手を静香に振りながら近づいてくる。そして、運悪く司安の後ろの扉から犬塚と共に蓮季が入ってきた。
「あっ」
蓮季の友人二人に拘束されている司安と、司安が友人二人を侍らせているように見える蓮季。経緯など知らないが蓮季が司安に起こるには十分な出来事だった。

「お前はいつもいつも！」
「お前には関係ないだろ。ついでに言うと、獅子がふざけただけで俺は悪くない」
「言い訳はダメだゾ」
　司安が蓮季のことを苦手な理由の1つは、幼馴染という奴だからだ。司安の父と蓮季の父が友人だったこともあり、幼き頃から親交があった二人だが初等部まではこんな関係ではなかった。
　蓮季は犬塚と関わるまで引っ込み思案だったし、司安は今と同じ平等主義だったが下級生を助けたりなどはしていなかった。2人の関係が大幅に変わったのは中等部に入ってからだ。
　犬塚の隣に立とうと以前より明るくなった蓮季は、より黒犬の為に……いや犬塚の為に行動し始めた。司安はというと平等主義が加速して、黒犬や白猫関係なく関係を持ち始めた。
　それらがきっかけで軋轢が生じ、彼らは互いを名前ではなく苗字で呼び合うようになったのだ。
「だいたい、いつもなんで関わってくるんだよ。お前は俺のオカンか」
「な!?私は仁愛と静香を心配してるだけだゾ」
「俺が2人に手を出したことなんてねーだろ」

「……それは」

言い淀む蓮季に司安は追い討ちをかけるように言葉を続ける。

「それに、もう俺はガキじゃねーんだよ。自分のことは自分で決めるし、もう関わってくんな」

俯く蓮季を背にして司安はそのまま席に座る。彼の隣に座っていた静香と仁愛は、いつのまにか離れてしまっていた。そして、教室の空気は最悪だ。普段は騒ぐ黒犬の男子たちも静かにしており、白猫の生徒たちも黙っている。そんな中、口を開いたのは犬塚だった。

「おい、司安」

「……なんだよ」

呼ばれて振り返った司安の肩を掴んで、犬塚は拳を振り上げる。司安は、防御の態勢を取ろうとするがそれすら遅すぎる。

「ちょっと、歯くいしばれ」

司安が放った最後の言葉は、隣に立っていた犬塚を怒らせるのには十分な理由になっていた。怒りのまま振り抜かれた拳は司安の頬に吸い込まれるように直撃し、彼の体が2，3メートル吹き飛ぶ。

「ぶへー！」

間抜けな声と共に机を巻き込みながら吹き飛んだ司安は、立ち上がる気配が無かったため周りの生徒たちのヒソヒソと話す声が爆発的に増えていく。
「死んだか？」
「あれは死ぬな」
「犬塚のパンチだもんな」
「振り向きざまに殴るとか犬塚鬼だな」
騒ぐ周りに対して犬塚はというと、自分の拳を不思議そうに見つめていた。先ほど司安を殴った時、感触が薄かったのだ。司安の吹き飛び方と拳に残る感触が全く比例してない。
（あの野郎後ろに飛んでダメージを受け流しやがった）
犬塚は直感で分かった。見た目に反して、ダメージは限りなく少ない。それに、あの寸前で防御から後ろに飛ぶに切り替えれるのは自分には不可能だと。
「蓮季あいつ何者だ？」
「犬塚のあほ！樽目は喧嘩なんてしたことないんだ。それを、犬塚が殴ったりしたら死んじゃうゾ」
「で、でもな蓮季あれは」
狼狽えている犬塚を他所になまじ意識だけは残っている司安は、痛みと脳震盪による

不快感と戦っていた。咄嗟に後ろに飛び、6割程度威力は殺したはずだった。
だが、それですら無意味。犬塚露壬雄のパンチはそれほど不公平なものだった。
（あのクソ馬鹿力が、受け流しても立てねぇじゃねーか）
ゆらゆらと揺れ霞む視界を我慢しながら、司安は椅子や机に体を支えながら立ち上がる。
「「なっ!?」」
周囲の驚きの声は司安の耳には届かず、よたよたと犬塚と蓮季に背を向けてそのまま教室から立ち去ろうとした。だが、完全には抜けきっていないダメージにより途中膝から崩れ落ちそうになる。
「司安!」
蓮季は咄嗟に叫び司安の元に向かうがそれは叶わなかった。
「あら?」
司安が出て行こうとしている扉から入ってきたペルシアが、床に膝をついている司安と目が合う。数秒の間2人の間には会話などは無かったが、ペルシアは教室の惨状を見る限り司安が殴られたのだろうということは理解ができた。
「……退いてくれ」
「嫌よ。こんなになってる人を放って置くのは貴族の名折れよ」

ペルシアはそう言って、司安の肩を担いでそのまま教室から出て行く。途中廊下をすれ違った教師は何があったのか忙しなく聞いてきたが、司安は喋る気力もなくペルシアはおおよその事情の予測を説明したのだった。

保健室まで運ばれた司安は、去って行くペルシアを呼び止める。本来ならば言葉を交わすことのない黒犬と白猫の生徒だが、この2人は別だった。

「……すまんな」

「別にいいのよ、怪我ぐらい誰でもするわ。あなたが怪我をするなんて想像もつかなかったけど」

「あいつが馬鹿力だったんだよ」

ペルシアは、ふふふと短く笑う。それに面白く思わない司安は少しばかり不貞腐れたように、……寝ると言って布団を被る。慌てたようにペルシアは謝るが、彼が布団から顔を出すことはなくため息をついてしまう。

「この学園で貴方とこんなに喋れるとは思わなかったわ」

それだけ告げると彼女は「それじゃ」と短く言い残して去って行く。ガラガラと保健室の立て付けの悪い扉の音を確認すると、司安は布団から顔を出してベットから起き上がる。

「同感だよペルシア」

そう言った彼は保健室の洗面台の鏡の前まで歩いて行く。その足取りは、よたよたとゆっくりだが確実に回復していた。ふう、とため息をついて自分の目に入っているコンタクトを取る。

ここで樽目家について少しばかり話をしよう。樽目家は、東和国の中でも名家である。

２０年前、当主である司安の父はある女性と恋に落ちた。自由奔放で妖精のような彼女に男は惹かれ、また女も真面目で優秀な彼に惹かれていった。

だが、２人の間には大きな問題があったのだ。２人の国は敵対関係にあったからだ。迷った末に女は東和国に亡命した。

女は国を捨て名を捨て男についてきたのだ。女の覚悟を受け止めた男は、家族の反対を押し切って女と結婚し子供を成した。

それが、樽目司安だ。

（……相変わらず似合わないなこの瞳は）

鏡に映る彼の碧眼はどこまでも青く、それを見るたびに自分はここでは誰とも違うのだと実感させる。彼は東和の父とウェストの母を持つ彼は所謂混血（ハーフ）であった。

一話

犬塚に殴られた日の夜、司安は赤く腫れた頬に氷で冷やしながら白猫寮まで来ていた。

なんでも、今日初等部の生徒が扉にラクガキをしたらしく、黒犬側が何もしないのは示しがつかないというわけで教職陣から信頼の厚い司安が駆り出されたのだ。

除去剤を大きく書かれたバカの文字に塗りながら、「はあ」と大きく溜息を漏らす。司安は優等生ではあるが、根っからの真面目では無い。

教職陣からの信頼は後々有利に働くだろうという一種の投資であり、こんな雑用は正直迷惑である。

（殴られるし、雑用頼まれるし災難だな）

再度溜息を漏らし、どんどんと薄くなってきているバカの文字にその憂鬱さをぶつけながら、除去剤の独特な匂いと格闘する。およそ一時間程度で文字が消え、扉の汚れ自体もだいぶ綺麗なっていた。

「はぁはぁ」と肩で息をし一時間にも及ぶ、自身の集大成を見つめながら安堵の表情を浮かべる。

（もう、こんなもんでいいだろ）

「あれ、黒犬の生徒がなんでウチの寮にいるの？」

間の抜けたような声とともに淡黄色の髪を三つ編みにした青年がふむふむと司安の方へと近づいて来る。

司安はその人物が誰か知っていた。いや、司安でなくともこの学園に通う学徒であれば、一度は目にする機会がある。

白猫監督生代表2年ケット・シィ。この学園の頂点の1人だ。

「挨拶がまだだったね。俺は2年のケット・シィ」

司安は普段目にすることが少ない白猫の代表に驚いたが、それでも容赦なくケットの攻撃……いや、口撃は続く。

「……こんにちんちん!!」

猛攻だった。

ズボンチャック所謂社会の窓から、拳を突き出すような変人。そんな者をこれまで見たことがなかった司安は思考回路がショートする。

「あ、はい樽目司安デス」

「あははは、ノリ悪いよ～樽目くん。スベったみたいじゃん」

「……スミマセン」

口が裂けても「面白くない」の一言が言えなかった。相手は、監督生の代表。
この学園の半分を束ねる天才集団のトップである。もし不用意に「面白くないっすよ」などと言えば、司安は白猫を馬鹿にしたと言われるかもしれない。
そうなればまずい自分が引き金を引いたみたいになるのは、司安としては最も避けたい道であった。
「代表」
凛とした声とともに空五倍子色の髪をツインテールにした女性が、ケットの後ろから現れる。
白猫2年監督生アン・サイベルだ。
「あ、サイベルちゃん！見てよ樽目くんってば酷いんだよ」
「こんにチッ!!」
再度ネタをしようとしたケットに、サイベルの凶拳がなんども放たれる。
「痛い、痛い！痛い!!痛いよサイベルちゃん」
「代表が泣くまで、殴るのを辞めません」
何度も何度も放たれる拳は、的確にケットの急所を捉えている。司安は飛び火しないように存在感をできるだけ消し、それをただ見つめることしかできなかった。
ゴッゴッゴッと鈍く短い音とともに放たれる拳にどんどん弱っていくケットを、ただ

見ていることしかできない司安。
「樽目くんサイベルちゃんを止め、止めてッ！」
「うるさいですよ」
制裁もひと段落した辺りで、燃え尽きているケットと凛と通常運転のサイベル、そしてそのサイベルに怯える司安。
三者三様ではあるが、確実にこの場を支配しているサイベルが司安の名を呼ぶ。
「樽目司安」
「は、はい!!」
軍人のように背筋を伸ばし敬礼する司安に、サイベルは淡々と告げる。
「きちんとラクガキを消せていますし、以前よりも扉を清掃している点については評価できます」
「ありがとうございます！」
「片付けはこちらがやっておくので、帰ってもいいですよ」
「はい。では、失礼します」
司安は、９０度に腰を折りすぐさま走り去っていく。その様は脱兎の如くもし、サイベルやケットが捉えようとしても無理だろう。
司安が走り去って行った後、白猫寮の前に立つサイベルは隣で燃え尽きているケット

を呼びかける。
「……代表、彼は行きましたよ」
スッと何事もなかったかの様に立ち上がったケットは笑いながら、
「一芝居打ってくれてありがとね。サイベルちゃん」
「いえ、芝居ではなく本気でしたよ」
「え!?」
「冗談です」
騒ごうとするケットに対して、彼女は「それよりも」と強引に話題を変える。
「あれが気にしていた樽目司安ですか?」
「うん、そうだよ」
ケットは樽目司安のことはすでに知っていた。白猫の生徒を初等部であっても、黒犬が助けるというのはイレギュラーであった。
そして、ケットは樽目司安という男を見極める為に、このラクガキの件を利用したのだ。
監督生代表が頼めば、教師達もそれに協力する。もし理由を聞かれても、優等生だからとでも言えば直ぐに納得してもらえる。
ケットは先ほどの僅かな時間司安を観察していた。それは、自身が殴られている間も

例外ではない。ケットの目から見ても、彼は一般生徒にしか映らなかった。
（彼は何か隠している気がする。今は何かわからないけど、きっとそれは重大な何かであると思う）
だが、それが怪しいのだ。
普通、監督生代表が目の前に現れれば取り乱すだろう。それが、敵国の代表であれば尚のことだ。
それが、司安は圧倒的に短かったのだ。それだけしか今はまだ要素はないが、あとはケット自身の勘としか言いようがない。
「確信したよ。樽目司安は、何か企んでる！」
「私には、そうは見えませんでしたが」
「……気がする」
ギュッ
「あれ？なんで拳握るの!!」

「あぁ！やめてサイベルちゃん!!せめて、手をパーにしてそんなに握りしめたらっ!!」
ゴッゴッゴッと鈍く短い音が白猫寮からその後も響き続け、最初のうち聞こえてきた

悲鳴も最後の方には聞こえなくなっていた。

＊＊＊

所変わって、広場の噴水前。
今まさにここで決闘が行われている最中、不幸にも司安が通りかかっていた。
キンッキンッと鉄と鉄がぶつかり合う甲高い音とともに白と黒の制服が交互に、立ち位置を入れ替えて戦っている。
見るからに双方本気。
司安の位置からは顔までは見えないが、白い制服の方は長い金髪（ブロンドヘア）とスカートである為女ということはギリギリわかった。
（うわ、こんなところで殺し合いかよ）
触らぬ神に祟りなし。そんなことを思いながら、司安はそそくさと退散しようと踵を返す。
（もし、明日学園から人が消えていても俺は何も知らん）

「好きだ！付き合ってくれぇぇ!!」
金切り音が激しくなる中、突如響く怒号に近い告白。
決闘というこの場において最も相応しくない愛の告白が、ただただ広場にこだまする。

「は？」

間抜けな声が司安から漏れ出る。
あの、二人は敵国同士だ。上手くいきっこない。バレれば破滅。もし、うまくいったとしても果ては、諦めるか全てを捨てるかの二択である。
歴史は繰り返される。
司安の父が母と出会った様に、人種が違えど恋に落ちることはあるはずだ。
その二人は茨の道だがその中に、幸せを見つけれるかもしれない。

だが、そこから生まれてきた子供はどうなる。

司安は知っている。その苦痛を。
自分1人が他者とは違うという苦悩を。
だが、司安は笑う。
（ようやくだ。ようやく、運が回ってきた）
司安は、自身の世代では絶対にないと思っていた。
特に仲の悪い自分たちの世代では互いに憎しみ合うことは出来ても、愛を囁くなんてことは絶対にできないと思っていたのだ。
だから、後々の世代でそれを作ろうと努力を続けた。
だが、自身の関与していないところでそれは芽吹き、願いが成就したのだ。こんなに笑えることはない。

「よ、よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ」

初々しい雰囲気に包まれる２人を打ち消す様に、

「あはははは！」

広場に響く笑い声に、ペルシアと犬塚は驚愕する。ごそごそと草むらをかき分けて出てきた司安は、驚きを隠せない２人に対して笑顔で放つ。

「覚悟はできているのか」

と、知る者だけが感じる重く冷たい言葉を。

「全てを捨てる覚悟があるのかと聞いているんだ。犬塚露壬雄、ジュリエット・ペルシア」

二話

（まぁ、そう簡単に覚悟なんて言葉言われても答えれんわな）

その場のテンションで飛び出てしまった事に後悔しながら、驚いている2人に目を向ける。2人とも焦りや、驚きが入り交じった表情を浮かべていて中々面白い。こういった二人は普段の彼らからは想像もできないからだ。

だが、問題が発生した。犬塚である。

（出るタイミングを見誤ったな。まだ、ペルシアは戸惑ってる感じだが犬塚は敵意むき出しなわけだしな）

今犬塚と争ったとしても、確実に負けるのが目に見えていた。ただ速さという一点では犬塚に勝ってる司安だが、それ以外は比べるまでもなく犬塚に分がある。

だからこそ、彼らに敵意がないことを伝える必要があった。司安は両手を上げて、今にも飛びかかりそうな犬塚を落ち着かせる。普段の犬塚なら手をあげるようなことはしないかもしれないが、今朝の蓮季と揉めあった一件で司安からすれば犬塚は危険人物である。

「まぁ、待て何もバラそうって話じゃない。バラすなら、お前らの前に出なくてもいい訳

だからな」
「どういう事だ」
「私達がお互いに一年のリーダー、その立場を利用しようというの？」
「いや、一年のリーダーだからじゃない」
「じゃあ、なんでだよ」
「まぁ、端的にいうとお前らに恩を売りたい」
鋭く睨みつける犬塚と不思議そうにこちらを見てくるペルシアにそう告げた。
「は？」
「この学園で平等に生活してるんだ、追放ってこともありえんことはないだろ」
「そんな事……」
そんな事ないという言葉を放つ前に、司安は静かにそれを遮った。
「無いと言い切れるか？丸流達のような過激な者達は、俺のことを良く思っていない。それに、行動に移していないだけで時間の問題かもしれん」
「そこまでわかってるなら何で！」
「平等が俺の答えだ。テストの時に間違いをあえて書くやつなんているのかよ」
「……何でそこまで」
犬塚は、ここまで平等にこだわる司安の事が分からなくなっていた。その執着に恐怖

すら感じてしまう。普段から白猫黒犬問わず平等に接してきた司安だが、そこまでの覚悟があるとは思わなかった。

先程司安が言った覚悟と言う言葉は、退学(この事)を指していたのだろうか。それはまだ犬塚にはわからないが、それもその一端であることは理解できた。

「俺は追放されても文句を言うつもりはない。だけど、周りの奴らは違う」

「獅子達の事か？」

司安はコクリと頷き、犬塚の方を見つめる。

「もし、俺が退学になった時関わっていた奴らにも被害が及ぶかもしれん。そうなった時には、俺は誰も頼ることができん訳だしな」

「俺たちにそれを頼みたいと？」

「そういう事だ」

司安は、悪役の様な笑みを浮かべながらどんどんことを進めていく。犬塚はふとある少女のことを思い出した。彼の親友である狛井蓮季だ。

彼女と司安とは学園入学前からの顔見知り所謂幼馴染という奴である。人当たりがよく、第一に黒犬のことを考えて行動する彼女は黒犬内での人気も高い。

そんな彼女と目の前にいる司安は、何故仲違いをしているのか不思議でたまらなかった。

「お前は蓮季の幼馴染だろ。今朝みたいにキツく突き放したのは何でだ」
犬塚の言葉に司安は黙り込み、その瞳からは少しばかり怒りが伺えた。犬塚は蓮季と司安の間には何かが有ると分かったが、その何かが正直まだわからない。
その何かこそが司安の平等を求める理由とも知らずに。
そして、その答えは隣に立つジュリエット・ペルシアが握っていることも、この時の犬塚はまだ知らずにいた。
「……そこまで言う筋合いはねーよ」
「は?」
「で、どうなんだ?」
「俺は受け入れるつもりだけどペルシアは?」
「え!?う、うん。私も受け入れるわ」
二人の同意に司安は少し笑って、契約を再び告げる。
「俺は二人の関係を他者に広めない。そのかわり、俺が退学になった時二人は関係者達を守ってほしい」
「ああ!」
「……分かったわ」
「契約書は後々作っておくよ。じゃあな見つからない様にしろよ」

そう言って、司安は二人の前から静かに立ち去っていく。その背中が消えるのを確認すると、犬塚は大きくため息をつく。
「はぁー、見つかったのが司安で良かったなペルシア」
「え！ええ。でも、彼……いえ何でも無いわ」
「……なんだよ言えよ」
「私の記憶とずいぶん印象が違ったから」
「俺もあんまし深く関わったことねーから、知らねぇけど蓮季はよくアイツの話をしてた。昔はよく遊んでた弟分だとか言ってたな」
「……そう」
「今朝、ぶん殴っちまったし悪いことしたな」
頭を掻きながら少し後悔した様に語る犬塚にペルシアは笑みを浮かべる。
「ふふ、明日にでも謝ったらいいんじゃない。それよりも寮に戻りましょ、誰かに見つかったら樽目よりもややこしくなりそうだし」
「そ、そうだな」
こうして二人は正式に恋仲となった。これから、ありとあらゆる困難が二人を待ち構えている筈だ。だが、二人ならきっと乗り越えられると信じて。

＊＊＊

犬塚と別れた後、ペルシアは自身の住む白猫寮へと足を進めていた。何かを考えながら進む彼女の足取りは非常に重い。今、彼女頭の中は今朝保健室に運んだ昔馴染みとも言える黒犬の生徒のことでいっぱいであった。別に、恋愛感情があるとかそう言う意味では決してない。

思い返してみれば司安が二人に提示した契約は、実質ペルシアへのリスクは無いに等しい。司安に関わるものの殆どが黒犬生であり、助けた初等部の生徒たちはその後お礼を言う適度で親しいわけでは無い。

だから、ペルシアにとってはあの契約はノーリスクであった。それがどうしても不可解である。それに、司安を少し馴染みのあるペルシアからすれば先程の彼は何かを隠している様にも思えたのだ。

（何故あの契約なのか意図が読めないわね）

「浮かない顔してるなペルシア」
「なにしてるの、この先には白猫寮しかないわよ」
　彼女に話しかけてきたのは、頭の渦中にいる樽目司安であった。
「まあ、一つ言おうと思ってな。答え合わせってわけじゃないが、今頃疑問に思ってると思ってな」
「なんのことかしら」
「自分だけノーリスクは可笑しい……って思ってそうだったからな」
　図星である。
　予想通りの反応だったのか司安は、少しいたずらをした子供の様に笑う。ペルシアが少し鬱陶しそうに司安を睨みつけると彼はすぐに笑みを消し平静に戻る。
「正直リスクをかけるつもりはなかったって言うのが本音だ」
「なぜ？」
　そもそもペルシアが疑問に思っていたのは、何故自分がノーリスクなのかである。それに、司安がもし退学したとしても契約を守るかどうかの確認は彼にはできない。
　そもそも、彼が提示した契約が破綻しているのだ。圧倒的に彼の方が不利である。それなのに何故、彼が自分に不利なものを提示してきたのかそれがどうしても分からなかったのだ。

「ウェスト公国でお前と王女様に世話になったからな恩返しだよ」
「本当に？」
「証明できるもんがないから、どうしようもない」
「はぁ、悩んでいたことがこんなにも下らないなんて思わなかった」
　ペルシアは呆れた様にため息をつく。だが、そこには少しばかりの安堵も含まれていた。自身の知っている樽目司安は変わっていなかったという安心から来たものだ。
「うるせ。お前と犬塚が付き合うなんて思わなかったよ」
「私も一時間前まで思いもしなかったわ」
　司安は「そーかよ」とだけ言い残すと、彼はペルシアの横を通り過ぎ自身の寮に歩みを進める。二人が交差した直後、思い出したかの様にペルシアが司安に問いかける。
「昔言ってた答えってもう見つけたの？」
「模索中」
「見つかるといいわね」
「どうかな」
「またね、シアン」
「そうだな、ペルシア」
　そうして二人は別れていく。

この時のペルシアは知らなかった。

（俺はただ知りたいんだ。混血（忌み子）として扱われてきた俺の生まれてきた意味（答え）を）

自身の知っていた彼はもういないということを。もう、樽目司安は変わり果て歪んでいるという事実を。無垢な少女（ジュリエット）はまだ知らない。

（犬塚（二人）とペルシアから両親（二人）を見てみたい。それが生まれた意味（答え）につながると信じて）

それを知るのは、勇敢な少年（ロミオ）ともっと惹かれあってからの話だ。決断の日はまだ先である。

三話

犬塚とペルシアが付き合い始めておよそ一ヶ月が経つ頃、司安はよく部屋に出入りするようになった犬塚に困り果てていた。司安自身なぜこうなったのか分からないが、あの日を境に犬塚は司安に積極的に関わるようになってきた。

司安としては正直勝手に出入りして来る犬塚にうんざりしているのだが、嬉々としてペルシアのことを語る犬塚にどうも強く出れないでいた。

「それでな、司安!その後は……」

興奮したように先日のデートの件を語る犬塚は、自分の彼女を自慢したくてたまらないのが目に見えて分かる。

それに、犬塚は長年の想いがようやく通じた事もあって、浮かれ方が尋常ではない。

何故なら、この話はこの部屋に入ってきてもう7度目だからだ。何を言ってもペルシアに繋げ最終的にデートの話に戻る。

まさに、無限ループ。

(長年の想いが通じたんだし、浮かれるのも分からん事もないが)

司安はそんなことを思うが、どうしてもため息が漏れてしまう。

もう、お腹いっぱいだ。これ以上語ってくれるなと司安は目で訴えるが、等の犬塚はにやにやとリャマみたいな顔でノロケ話を続ける。

恋は盲目というが、犬塚の場合は全盲かもしれない。

（ここまで浮かれるのは予想外だ）

いつもの鋭い眼光で誰も近寄らせない孤高のリーダー犬塚露壬雄の姿は無く、鼻下を伸ばした間抜け面で彼女のノロケ話を永遠と語るただのうざい彼氏である。

犬塚に一度負けた司安としては、こんな隙だらけの彼の姿など見たくはなかった。

「どうしたんだよ」

司安は不思議そうに聞いてくる彼に、怒る気にもなれず「何でもない」と返す。それからまた長々と惚気られるのだが、それは語らないでおこう。

数十分程度経ち犬塚も満足したところで司安の部屋を出ようと思い腰をあげる。

「んじゃ、部屋戻るわ明日ペルシアに会う予定だし」

「バレないようにしろよ。特に、監督生（プリフェクト）にでも感付かれたら逃げれねーぞ」

「そもそも、バレねーようにするから大丈夫だ」

犬塚は、明らかに油断していて本来すべき警戒心は皆無であった。これでは、隠せばバレないものもバレてしまうのではないかと心配になる。

司安としても、此処で二人の関係がバレるのは面白くない。聞く耳を持たないかもし

れないが、犬塚に再度最終の注告をする。
「まあ、頭の片隅にでも入れとけ。天才集団（プリフェクト）は普通じゃないからな」
「お前案外いいやつだな」
ニカっと子供のように笑う犬塚に、やはり警戒心はないのかと頭が痛くなる。『簡単に人を信じるものじゃない』と習ってきた司安にとって、犬塚が此処まで簡単に自分に近づいてくるのが不思議でたまらなかった。
秘密の共有によって仲間意識でもあるのだろうかと疑問に思う司安であったが、こうも簡単に人を信じれるのも犬塚の良さなのかもしれないと思ってしまう。
「自分の為だよ、巡り巡って自分に返ってくる恩も仇もな」
「誰の言葉だ？」
「母親の口癖だ」
「いい言葉だな」
「そう、思ったことはないな」
そう答えた司安の表情が少し暗くなる。瞳の奥にはどこか、諦めというか無気力さというか言葉で言い表せない様な虚無感が蠢いていた。
はっと気を取り直し「なんでもない」と犬塚に告げ、私案はそのまま机に向き合う。その様子に犬塚の少し驚いてしまう。

「勉強するから帰ってくれ、集中できん」
「べ、勉強してるのか？」
「そりゃ、凡人だからな」
そう皮肉の様に言う彼の顔は見えないが、その声音にはどこか悲しさを帯びていた。
「お前頭良かっただろ」
司安の前のテストの成績は黒犬の中でｎｏ．２、学年では3位であった。学年1位であるペルシアと2位の蓮季には僅かに及ばないが、司安は天才といわれる部類だと少なくとも犬塚は思っていたのだ。
「さぁな、上には上がいるしな」
例えば、狛井蓮季。彼女は、テスト期間中同学年の黒犬生徒たちに勉強を教えている。自分の勉強を蔑ろにしても、黒犬の皆に合格してほしい一心で頑張っている。
それでも、彼女は2位を取れるのだ。確かに誰かを教えることは、さらに理解を深めることができる。
だが、このダリア学園は、東和国とウェスト公国を合わせた幾つもの学園の中でもトップに位置する超名門校である。
自分の時間を割いてまで誰かに勉強を教えて、そこで2位を取れるかと言われればそれは不可能に近いはずだ。

それはもう、ある種才能である。
「狛井が多分全力で自分の時間を使えば、学年1位くらい取れる。下手すりゃ飛び級だってあり得るな」
「は、何言って」
「誰がなんと言おうと、あいつは天才だよ。でも、あいつが皆に勉強教えてなかったら、今頃黒犬の数は半分以下かもしれんけど」
けらけらと笑いながらも決して、彼の右手に持たれたペンの走りが止まることはない。これまでも、きっとこれからも彼は努力を続けるのだろう。
司安の後ろ姿はひどく酷く小さい。一人で抱え込んでいるとは分かっているだが、生半可な思いで彼に手を差し出すことはできないと犬塚は直感でわかった。
(似てるな)
そして、それが少し眩しく見えた。さらには、自分の憧れたペルシアに在り方が似ているとさえ思ってしまうほどだ。だが、その考えをすぐさま否定する。
「さ、帰ってくれ」
「あぁ、邪魔したな」
「別に邪魔とは言わねーよ、面倒かっただけだ」
「お前友達いねーだろ」

「うっせ」

＊＊＊

翌朝いつもより早く教室にいた司安は、席に腰かけ頬杖をつくいて教室を眺めていた。今日はいつも通りというわけではなくどこか慌ただしい雰囲気を白猫の生徒たちが出している。

そこへドタドタと慌てた様子の白猫生がやってきた。は、は、は、と短く息切れをして喋りづらそうにしているが、数秒後には息も整い慌てていた理由を周囲に叫ぶ。

「大変だ〜!!シャル姫が復学されたぞ!!」

「な、あいつが!?」

慌ただしさがドッと増した。当然だ、良くも悪くも彼女は一国の第一王女。白猫なら

ば羨望の眼差しを送り、黒犬ならば侮蔑の視線を送る。
（面倒なことになった）
司安は、所謂家の事情というやつで、父の付き添いにウェスト公国訪れたことがある。そこで、彼はペルシアと件の彼女と出会ったのだ。
少しの間ではあったが彼女らと関わった司安は、シャルに感謝しているがそれ以上に彼女を恐れていた。彼女に関わるということは紛争地にタンクトップとジャージで行く様なものである。
気まぐれという名の流れ弾が拒否権なく行使される。まさに、地獄という他ない。
（まあ、あいつも人がいる時には関わってこないだろ）
ワッー！と外から騒がしい丸でパレードの様な歓声が聞こえてくる。一目見ておこうと廊下に出て中庭にいる彼らを見下ろす。
赤絨毯が敷かれた中庭を悠々と歩き白猫生たちに手を振る姿は、正しく臣民たちに手を振る王女のそれだ。だがそれも、ペルシアが彼女の前に現れるとそれまで進んでいた足取りはぴたりと止まる。
（よく見えん）
何か一悶着あった様にも見えたが、それよりも彼女の関心はベンチに座っている犬塚を筆頭とする黒犬たちに向いていた。

司安の位置からでは聞こえないが、シャルが黒犬たちを挑発しそれに乗せられた犬塚が飛びかかる。シャル姫と犬塚の直線上には誰もいない。

膂力で勝る犬塚と正面から戦って、いくら運動神経抜群とはいえシャルが勝てるはずがない。ならば、何故その状況を作り出したのか。

答えは簡単だ。

弱みを握っているから。

ピタッと殴りかかるモーションで静止した犬塚は急に後ろにひっくり返る。

「ぐわぁぁぁぁぁ!!や～ら～れ～た～!!」

「!!」

そして仰向けに寝転がった犬塚に近づいたシャルは、ぼそぼそっと犬塚にしか聞こえない様な声で何かを伝える。犬塚は抗議したい様子ではあるが、あの様子ではそれは虚しく終わるだろう。

司安が教室に戻ろうかとした時、ふと彼女と目があってしまう。彼女は一瞬だけ驚いた表情を浮かべ、その後ニヤリと不吉に笑っている。

（勘弁してくれ）

「シアン出てきなさーい！窓からコソコソ観察して何してるのかしら～」

にこにこと手を振るシャルの後ろには鬼の形相で肩を揉んでいる犬塚がいた。司安

は、とんでもないところから飛び火してきたと思いながら廊下を駆け抜け中庭を目指す。

対岸の火事を笑っていたら、対岸側の人間から松明を投げられた気分である。

1分程度で中庭に着いた司安は、ゼェゼェと荒く息を乱していた。当然だ、普通ならば急いでも2分はかかる。文字どおり限界を超える勢いで限界を超えたのだ。

先ほどまで肩を揉んでいたはずの犬塚は、蓮季にリンチされている。

「目を覚ましてー!!」

胸に釣られた思っているのはあれだが、蓮季の行動は正しい。敵国の王女の命令を聞くリーダーなど認められるはずがない。

「犬塚のやつきっとあの胸に釣られてたんだぜ」

「慎ましい黒犬女子とは違うからな。豆鉄砲とバズーカぐらい差があるよな」

「「あ!?」」

この場で黒犬の男子と女子の間に軋轢が生じたのは言うまでもない。

中腰になりながら息を整える司安は顔だけでも睨みつける様に、シャルの方を見上げる。だが、彼女の笑みにはもっと明るくなっていた。何かを懐かしむ様に。

「相変わらず足速いのね〜」

「シャル姫、大声で黒犬の男を呼ぶなどはしたないですよ」

酸素が脳に回らない状態の司安ではシャルに勝つことはできない。通常でもだいぶ怪しいのに、回復していない状況で戦えば敗北は火を見るより明らかだ。
（頑張れ）
「……スコット今は機嫌が良いから何もしないけど～、次喋ったらて・い・も・うさせるわよ～」
「ヒィィ!!」
（もっと頑張れよスコット）
そのスコットのおかげで息はだいぶ整ったのだが、次の一言が脳に酸素が行き渡らない事よりも彼の頭をショートさせる。
「そういえば昔黒い犬が欲しかったのよね～。ねえ、シアン私のものになりなさい」
「は？」